

教員氏名：林 智草（児童教育専攻／准教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

教育学部児童教育専攻に所属しており、小学校教諭免許状、幼稚園教諭免許状、保育士資格の取得に必要な科目を主として担当している。令和8（2026）年度の担当科目は以下の通りである。

科目名	開講年次	科目区分
音楽表現演習Ⅰ	1年前期	幼稚園教諭必修および保育士選択必修
幼児と表現A	2年前期	幼稚園教諭必修および保育士選択必修
音楽	2年前期	小学校教諭選択
音楽表現演習Ⅱ	2年後期	幼稚園教諭必修および保育士選択必修
保育内容（表現A）の指導法	3年前期	幼稚園教諭必修および保育士必修
初等教科教育法（音楽）	3年前期	小学校教諭必修
音楽表現演習Ⅲ	3年後期	幼稚園教諭選択および保育士選択
授業観察演習	3年後期	幼稚園教諭選択
保育実習Ⅰ（施設）	3年後期	保育士必修
保育実習指導Ⅰ（施設）	3年後期	保育士必修
保育実習Ⅲ（施設）	4年前期	保育士必修
保育実習指導Ⅲ（施設）	4年前期	保育士選択必修

また、これらに加え、学部全体の科目として基礎ゼミⅠ・Ⅱ、総合ゼミⅠ・Ⅱ、教育学研究法Ⅰ・Ⅱ、教育学研究法、卒業研究を担当している。この他、高崎市立高崎経済大学附属高等学校において音楽科「器楽」を担当し、1～3年生の鍵盤楽器（ピアノ）の実技指導を行っている。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

私自身の専門は芸術学であり、その中でもピアノの演奏表現を主たる研究領域としている。そのため、音楽教育学や幼児音楽教育を専門として研究してきたわけではない。しかし、演奏や研究を続ける中で、音楽は専門的な教育や訓練を受けた者だけが享受するもの

ではなく、誰もが親しみ、自らを表現し、他者とつながるための大切な文化であると考えようになった。

乳幼児期や児童期における音楽は、単に音楽を聴いて楽しむことにとどまらない。音やリズム、身体の動きなどを通して五感を働かせ、様々な感覚や認識を育む重要な役割を担っている。また、小学校学習指導要領においても、音楽科は生涯にわたって音楽に親しむ資質・能力を育成することを重視している。こうしたことから、乳幼児期から学童期にかけて音楽に親しむ経験は、人間形成の基盤として大きな意味を持つものと考えている。

本学は保育者・教員養成を目的とする大学であり、私の授業も音楽家や演奏家の養成を目的とするものではない。本学の学生の多くは、将来、幼稚園や保育所、認定こども園、小学校などにおいて子どもたちと関わる立場となる。そのため、授業では高度な演奏技術の習得のみを目指すのではなく、保育や教育の現場で必要となる音楽的知識や技能を身に付けるとともに、子どもたちと音楽活動を展開するための実践力を育成することを重視している。

一方で、保育者や教員を目指す学生が、必ずしも同じ音楽経験や技能を有しているわけではない。ピアノ経験の豊富な学生もいれば、これまでほとんど音楽活動に取り組んだ経験のない学生もいる。そのような多様な背景をもつ学生に対し、一斉授業の中で必要な知識や技能を身に付けさせることは容易ではない。しかし、だからこそ一人ひとりの実態に応じた支援を行いながら、将来必要となる基礎的な力を着実に育成していくことが重要であると考えている。

また、保育・教育現場において重要なのは、高度な演奏技術そのものではなく、保育者や教師自身が音楽の楽しさや表現する喜びを理解し、それを子どもたちに伝えられることである。子どもたちは、保育者や教師の姿を通して音楽に出会い、その魅力を感じ取っていく。そのため、授業では保育・教育現場で必要となる音楽的知識や技術の習得を基盤としながら、歌唱や器楽活動だけでなく、身体表現や創作活動など、多様な表現活動を取り入れるよう心がけている。

私は、学生自身が音楽の楽しさや面白さを実感し、感性や表現力を高めることによって、将来、子どもたちと共に音楽を楽しみながら豊かな表現活動を展開できる保育者・教員へと成長していくことを願っている。そのために、確かな知識と技能の習得と、音楽を通じた主体的な表現活動の両立を目指した教育を実践している。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

『音楽表現演習Ⅰ』や『音楽』においては、対面授業での指導に加え、動画を活用した授業を展開している。例えば、『音楽』ではピアノ初心者向けに簡易楽譜を提示すると同時に、ピアノの鍵盤を俯瞰するアングルで撮影したお手本動画を Google Classroom を介して配信し、個人練習の一助として活用してもらっている。

また、授業で使用する教材についても工夫を行っている。一般的な市販の教則本には、学生にとって馴染みの薄い楽曲が含まれていることも多く、特にピアノ初心者の場合、楽譜を読むことと演奏技術の習得に加え、楽曲そのものへの理解にも負担を感じることもある。そこで、学生が幼少期から親しんできた童謡や学校教育で扱われる楽曲、流行歌などを中心に選曲したオリジナルの楽譜集を作成し、授業のテキストとして活用している。既知の楽曲を教材として用いることで、音楽的なイメージを持ちながら学習に取り組むことができ、初心者であっても興味・関心を維持しながら主体的に学修を進められるよう配慮している。

さらに、課題曲については簡単な伴奏譜（和音奏）からやや難しいもの（アルベルティ・バスなど）を満遍なく配置し、徐々にステップアップを図れるよう構成を工夫している。特にピアノの学習経験がないままに教員養成校に入学した者にとって、両手でピアノを弾けるようになるには相当な努力が必要であり、その過程があまりにも苦しければ、「音楽（ピアノ）＝苦痛」と刻みこまれてしまうだろう。学修到達目標を最終目標としつつ、授業では着実に目標を達成できるよう、スモールステップを心がけ、毎時、学生一人ひとりの進捗を把握し、必要に応じて個別のフォローアップを行っている。また、学習の進捗状況に応じて柔軟に指導方法を調整し、受講者全体の理解度が向上するよう努めている。こうしたアプローチにより、学生は自己効力感を高めながら、授業の目標を達成していくことが可能となる。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

上記のような方法で授業を展開することにより、シラバスに掲げる学習到達目標を達成しやすくなっていると感じる。特に、『音楽表現演習Ⅰ』や『音楽』（2年次科目・小免選択）では、この科目で初めてピアノに触れる学生が例年4割程度存在するが、半期15回の授業を通して簡単な楽譜であれば両手で演奏できるようにまで成長する。通常、ピアノの演奏技術習得にはそれ相応の時間を要するものだが、必要に迫られてピアノを弾かなけれ

ばならないという環境に加え、上記のような教材やお手本動画の提示がピアノ演奏技術の習得に大いに役立っていると考えます。

また、各学期末に実施している学生による授業評価アンケートではいずれの科目も概ね高い評価を得ており、授業方法については適切だと判断できます。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

学生のタイプは年々変化していると感じる。例えば、児童教育専攻幼児教育コースに入学した学生のうち、ピアノ初心者の占める割合は以前よりも高まっている。また、幼少期にピアノの学習経験があっても「上級者」と呼べる学生は減少しており、感覚的には6割程度が初心者、もしくはそれに準ずるレベルにある。そのため、学生が半期15回という限られた授業回数の中で着実かつ効果的に演奏技術を身に付けられるよう、課題曲の選定や難易度について継続的に検討していきたい。しかしその一方で、実習や卒業後の保育・教育現場において困ることのないよう、求めるべき到達水準は維持しなければならない。そのためにも、授業における学生の反応や理解度を丁寧に把握しながら、適切な指導内容を模索していきたいと考えている。

また、近年はICT環境の整備が進み、学生が授業時間外にも主体的に学習できる環境づくりが重要になっている。音楽の授業では個人差が大きく、限られた授業時間だけでは十分な学習機会を確保することが難しい場合もある。そのため、現在活用している演奏動画や教材の充実を図るとともに、特に音楽理論分野におけるICT活用を推進したいと考えている。音符やリズム、拍子、音階などの基礎的な内容については、WEBでの確認テスト等を組み合わせることで、学生が自分の理解度に応じて繰り返し学習できる環境を整備することが可能である。今後は対面授業での実技指導とICTを活用した自学自習支援を効果的に組み合わせることで、学生一人ひとりの学びをより充実したものにしていきたい。

【添付資料】 ※全部又は一部の現物を省略しています。

- 1 担当科目のシラバス
- 2 授業で使用している配布資料のサンプル